

えぬびい Oh!

2011夏
Vol.48

▷2P

『お金のはなし』 Part 1

動きはじめる今年はファンドレイジングこうち元年

▷3P

東日本大震災支援に取り組むNPO⑩

▷4~5P

中間支援組織の抱える課題と 今後の方向性

新生『えぬびい Oh!』発刊にむけての
アンケート調査結果

▷6~7P

想いをつなげる Vol.1

〜とさっ子タウンの魅力に迫る〜

▷8P

こどもたちが運営するまち

『とさっ子タウン 2011』

ボランティアガイドス2011

発行

高知市市民活動サポートセンター

企画編集

特定非営利活動法人

NPO高知市民会議 広報部会

〒780-0862 高知市鷹匠町2丁目-1-43 高知市たかじょう庁舎2階
月～金/10:00～21:00 土/10:00～18:00 (日・祝日は休み)

TEL:088-820-1540 FAX:088-820-1665

E-Mail: npokochi@siminkaigi.com

<http://www.kochi-saposen.net/>

『お金(ファンドレイジング)のはなし』 Part1

動きは始める今年はファンドレイジングこうち元年



2010年度公開審査会の様子

1年前、この紙面にて「意志あるお金」NPOの資金確保とNPOバンクの可能性を書いた。積年の課題であるNPO・市民活動団体の資金確保の困難性を説きつつ、ここ高知での借り手と出し手を結ぶ貸し手が手を結ぶしくみづくりの可能性やNPOバンクの可能性などについてオモイを綴った。それから1年、この「意志あるお金」を求めて、ここ高知では大きなうねりとなって動きは始めることとなる。今号は、その中でも大きなうねりの原動力となるであろう「公益信託高知市まちづくりファンド」、「ファンドレイジング・ジャパン in こうち」について紹介したい。今回は紙面が限られているため概要だけだが、今年度、本テーマ『お金(ファンドレイジング)のはなし』は連載扱いとし、次号より右記の活動をはじめ、高知でのファンドレイジング事情をじっくりと追いかけ、読者といっしょに考えていきたい。

□その一 更なる進化に期待がかかる
「公益信託高知市まちづくりファンド」

高知市市民と行政のパートナーシップのまちづくり条例に基づき、高知市が平成15年に3千万円を出し「公益信託高知市まちづくりファンド」を創設、現在まで運用されている。

本ファンドを活用された団体も多くいることだろう。ただ、このファンドも当初より10年を以って一つの区切りと考えられており、その10年がもうじき訪れようとしている。

そこで、今年度、公益信託高知市まちづくりファンドの今後の在り方に関する検討委員会が立ち上がり、より一層の市民協働のまちづくりのために、本ファンドをより高みに仕上げていくしくみづくりの検討がスタートした。どのようなステキな新ファンドが提起されるのか期待しながら、追いかけていきたい。

□その二 寄付文化を高める
「ファンドレイジング・ジャパン in こうち」の開催

NPO等の活動に欠かせない資金調達に関わる新しい社会の動きや、NPO・地域づくり団体・企業など様々な分野での成功事例など、参加者が新しい気づきや学びを得られるよう多様な取組み紹介及び情報交流を目的とする「ファンドレイジング・ジャパン in こうち」が来春(平成24年3月3、4日)開催される。これは、同目的で毎年東京にて開催されている「ファンドレイジング・日本」(日本ファンドレイジング協会主催)の高級版である。ここ高知でのファンドレイジングの意識を高め、寄付者の理解、共感を得て、寄付文化が更に発展し、定着していくことへの出発点となることに期待したい。(しのみや)

★ファンドレイジング用語

(その一)

今回は「ファンドレイジング」...
今回は「ファンドレイジング」とは、至極簡単にいうと組織が活動していくための資金集めについて使われる用語である。「方、ZPO」や市民活動にとって単にその活動資金を調達するだけではなく、支援を募る過程において、様々な社会の課題を知ってもらい、理解と共感を得る中で、その課題解決への参加を促し手を取り合いながら、よりよい社会を目指すところに意義があるのだ。

★トピックス「寄付税制の改正」

今年6月22日に新寄付税制が成立、この7月より運用がはじまる。①所得税の税額控除制度の導入、②認定NPO法人の認定要件の緩和、③地域において活動するNPO法人等の支援、④日本版ファンド・ギビング税制(※)の創設である。他国に比べ寄付文化が遅れている日本にとって大きな一歩となるのではないかと。

※日本版ファンド・ギビング(特定寄付信託)とは、一言でいうと寄付が進みやすくなるしくみだ。信託制度を活用して、資産を認定NPO法人などに寄付でき、預けた財産から生じる利子所得が非課税になるなど特典がある。米国ファンド・ギビング信託では、寄付控除による寄付創出効果により高齢者による寄付が加速し、現在、信託残高は12兆円にのぼっているとのこと。

東日本大震災支援 に取り組むNPO ①

①

未曾有の災害、東日本大震災を前に声を失い、そして被災しなかった人は何か自分にできる支援はないかと考え行動に移している。「お金を送る」「被災地域の商品を購入する」「被災地に必要なものを贈る」「各種ポイントで募金」「ボランティア活動をする」など、被災地の復興のための支援方法は色々です。

シリーズ「東日本大震災支援に取り組むNPO」第1回目は、大きな被害を受けた被災者ならびに被災地の支援を行う市民活動のうち、支援金、被災者が高知に居を構えるときの支援物資集めなどに取り組んでいるNPO団体・個人にスポットを当て、紹介する。

はじめに

今回取り上げる、「東日本大震災支援プロジェクトこうち（以下「プロジェクトこうち」）は、特定非営利活動法人NPO高知市民会議、高知市民活動サポートセンターと、社会福祉法人高知県社会福祉協議会、高知県ボランティア・NPOセンターが主体となり設立。平成23年4月22日から半年間をメドとして、①高知県内に避難してきた世帯を対象とした生活物資提供等の支援、②被災地への顔の見えるピンポイントの物資提供等の支援、③支援のために必要となる資金等の募金活動、④支援活動におけるボランティアコーディネート、⑤その他被災地支援として必要と認めらるる活動を実施する。

プロジェクトこうちの代表 山崎水紀夫さんに、設立への思い、これまでの取り組み、これからの活動などについてお話しいただいた。

設立への思い

行政支援には限界がある。98豪雨でボランティアセンターの代表を務めた経験から、行政との連携を図り、各団体の持つ資源やネットワークを活用する、官民協働による支援を目指し、東日本大震災支援のためプロジェクトこうちを設立した。

山崎さんは震災から1週間後の3月18日から9日間、岩手県大槌町で被災地に対する直接支援を行った。被災地では「おく生きていたかっ」が合言葉のように交わされる、その惨状に復旧支援の長期化、息の長い支援の必要性を痛感した。

これまでの取り組み

4月22日のプロジェクトこうち発足当日には、手始めに県内農家グループ「俵入魂たねびの会」（以下「たねびの会」（川村一成代表）から贈られたお米と「たねびの会」に協賛する県内の事業者等から提供された高知の特産品を、プロジェクトこうちが窓口となり、本県に避難されている12世帯に発送した。

また、4月24日に丸ノ内緑地で開催された「アースデイズ2011高知」で会場内に募金箱を設置、たねびの会も新聞バッグ入りの「俵入魂応援米」5合を300円で販売し、その売り上げを本県避難者支援にあてた。その後も、「たねびの会」の協力のもと、5月5日にはこどもがいる世帯にアイスクリームを送ったり、5月23日には再度、お米と高知の特産品を送った。さらに、県を通じて把握したニーズにこたえるべく、各世帯が必要としている扇風機や冷蔵庫等の家電の調達等もしている。

5月には支援金振込口座（四国銀行県庁支店口座番号5102364 東日本大震災支援プロジェクトこうち 山崎水紀夫代表）も開設した。

これから

仮設住宅への入居や季節などの節目で被災者のニーズや支援の内容も変わってくる。阪神淡路大震災の1週間が東日本の1カ月ともいわれる復旧復興の長期化に備え、必要な物資を先読みし、息の長い支援が不可欠です。NPOなど市民活動団体は、日頃から顔の見える活動をしており、日頃のネットワークを生かした、得意分野である行政ではできないきめ細かで柔軟な活動を行う。そして、震災を教訓として活かすことで、被災地に「ありがとう」の感謝を、この高知から伝えられたらと思う。

（のむら）



発送作業をする「たねびの会」とプロジェクトこうちのメンバー

中間支援組織の抱える課題と今後の方向性

はじめに

阪神淡路大震災をきっかけに大きく広がったボランティア活動。そして平成13年に特定非営利活動促進法（NPO法）が施行され、はや10年以上が過ぎた。高知県によると県内承認NPO法人も当初の14団体から平成23年5月現在260団体に増えている。

その間、国民の市民活動に対する意識もずいぶん変わった。今日では「新しい公共」という言葉に代表されるようにNPOの果たす役割は大きく変わりつつある。

そして、この度の東日本大震災により国民のNPOに寄せる期待はますます大きくなっていくものと思われる。

しかしながら、多くのNPOの実態は、会員数の伸び悩みに苦慮し、会費や本来の業務による収入の不足を補うために行政からの委託や補助金に資金源を求めており、組織的にも財政的にも脆弱である。対等な立場で協働を担うはずの行政とNPOが、いつのまにか行政の下請けになっているのではないかと危惧される。

そこで、今回特に高知県内の主だった中間支援組織である「高知県ボランティア・NPOセンター」（「特非」NPO高知市民会議）（「特非」高知西部NPO支援ネットワーク）（「特非」環境の杜こうち）の各団体にアンケートの調査で協力いただき、NPOにおける中間支援人・物組織の抱える課題と今後の方向性を考えてみた。



NPO 高知市民会議が指定管理を務める高知市市民活動サポートセンターが所管するまちづくりファンド公開審査会

現状と課題

調査結果から主に5つの事項について現状と課題をあげてみる。

①「今中間支援組織に求められるものは何だと思われるか」という問いには、各団体ともに、様々なNPOの活動に対するアドバイスや支援のためのコーディネート力が必要と答えている。

②「自らの組織持続のために取り組んでいるか」については、財政基盤の確保、助成金委託料のほか、新たに自らの事業を模索する姿が見られた。

③「組織力アップのために取り組んでいるか」については、OJTによる取り組みや次世代育成のためにリーダー、サブリーダー制を取り入れているという回答があった反面、あまり取り組めていないという回答も寄せられ、各団体によってばらつきが見られた。

また、団体の認知性を高める情報発信については、広報誌やネット、イベントを通じた取り組みが多くなされていた。

④「行政との関係については」、良好と答えた団体がほとんどだった。

全国市町村国際文化研究所と（特活）市民社会研究所が2009年に全国480の中間支援団体を対象に行った「自治体とNPOとの協働等に関する中間支援団体調査」でも、「行政（自治体）はNPOの理解をしてくれている」「独立性を尊重してくれる」「意見を聞いてくれる」との意見が半数以上を占めている。

だが、本当にそうだろうか。勿論NPOを所管する部局での理解や尊重はあると思うが、行政全体としてはまだまだの感がある。高知県の「新しい公共支援基金事業基本方針」では「行政職員

の社会貢献に対する理解や認識を高めることや現場を知ることが『新しい公共』を進めるうえでの課題」として取り上げられている。

⑤「不足しているもの」は、殆どの団体が情報・人材・資金・技術力と回答している。

今後の方向性

今回の調査により、中間支援組織は、更なるコーディネート力が必要であり、人材育成も欠かせないと思っではいるものの、まだまだOJT等による取り組みに留まっており、高い専門性や技術力を身につけるためのスキルアップが必要と感じていることが分かった。

これらを解決するものの一つには、個人や単一組織の取り組みだけではなく、組織間をつなぐ人事交流やNPOフォーラムのような団体同士のジョイント事業があるのではな



高知西部NPO支援ネットワークが仕掛け開催が始まった海辺の日曜日（黒潮町）



こうち NPO フォーラム 2010 実行委員会と
4 団体が主催するこうち NPO フォーラム 2010

【用語の説明】

OJT…職場での実務を通じて
行う従業員の教育訓練。



環境の杜こうち(環境活動支援センターえこらぼ)が行う「eco 学ぶくん」を使った屋外での環境授業

「民」に任せるものは任せる、単なるコストダウンではなくサービスの質の向上や広がりを目指した視点でアウトソーシング(外部委託)を進めてもらいたいと



高知県ボランティア・NPOセンターが行うNPO経営塾

また、寄付金制度等の仕組みづくりにより財政的に自立することも求められる。そして行政は、「民」に任せるものは任せる、単なるコストダウンではなくサービスの質の向上や広がりを目指した視点でアウトソーシング(外部委託)を進めてもらいたいと

いだろうか。そして、財政基盤を安定させ職員のためには必要なことだと考える。また、情報発信については、広報誌やホームページ、イベント等を通じた取り組みは、知りたいと思う人には有効だが、広く一般市民に裾野を広げるとい意味では、現在NPO高知市民会議が高知新聞社と協議を進めているコラボ事業は特に有効ではないかと考える。

どの団体も頭を悩ませている財政力アップについては、行政からのアウトソーシングを待つだけでなく、行政が行っている事業であってもNPOセクタが担えるものは、提案力を発揮して新たな受託を開発したり、もう一歩進んで委託・助成金に頼らないコミュニケーションの視点で新たな財源を考えることも必要になってくるのではないだろうか。本来の業務から派生する事業に財源の「種」がないか探ることも一策だろう。

思う。

そのためには、現在行政が行っている事業見直しを行政既存の価値観ではなく、「民」やNPOを含めた新たな価値観で行いイノベーションすることが必要ではないだろうか。

今後の中間支援組織には、NPOを支援するNPOとして、将来を見据えてNPOと行政、企業、市民をつなぐ活動が望まれる。

最後に、今回の調査で、「環境の杜こうち」から寄せられた、「現状を捉え対処することも必要ですが、未来を読み、そこに到達するための手段を絶えず模索することが必要ではないでしょうか。」という言葉が印象に残った。

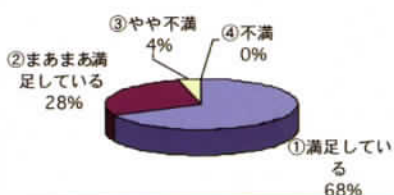
ご協力いただきました各団体の皆様ありがとうございました。

(森岡)

新生『えぬびい Oh!』 発刊に むけてのアンケート調査結果

『えぬびい Oh!』の発刊から10年を迎え、今一度読者の皆さまの感想・ご指摘を広く受け止め、新生『えぬびい Oh!』を立ち上げるべく、前号においてアンケートをお願い致しました。25名の方からご回答を頂きましたので、ここで紹介致します。

『えぬびい Oh!』満足度調査



25名中、24名の方に「満足している」もしくは「まあまあ満足している」の結果を頂いたことを、広報部会一同、素直に喜んでおります。かんかんがくがく議論を交わし、迷いながらも歩んできた道は、ある程度読者の皆さまの信認を得ることができたようです。発行時期についても、22名の方に「今までどおり年4回でよい」との回答を頂いております。

ご意見の一部をご紹介します。

「文字の大きさや色遣いがよく、とても読みやすいと思います。内容も素晴らしいですね」

「高知県では、当たり前になっている市民活動やイベントが、他県ではとても珍しく面白いものであることは多くあります。発想が面白い。そういったものを他県にもっと発信して欲しいな、と高知好きは思っています」

「ミッション系の団体が多い様に思われるので、地縁系の団体も取り上げてみてはいかがでしょうか」

「市民会議さんの広報誌を見ると、多様な活動をサポートセンターの枠を越えながら実践されていることに感動します。環境・子ども・災害…いつまでも「生活」につながる支援センターであって欲しいと思っています」

頂いたご意見の全てを真摯に受け止め、これからも、広報部会一同、アンテナを研ぎ澄まし、手にした方の心をすつと揺さぶるような、そんな誌面を作っていきたいと思っております。

さて、この夏号から表紙のデザインがぐっと変わったことにお気づきの方も多いかと思えます。広報部会のデザイン担当として、国際デザインビューティカレッジから、学生の前野さくら(19)さん、西森美和さん(20)が新たに加わってくれました。表紙のデザイン等も全て、この学生が仕上げたものです。

平均年齢がぐっと下がってフレッシュになった新広報部会。これからも、様々なテーマで、高知らしく発想豊かな市民活動を、楽しく分かりやすく、皆さまに発信していきたいと思っております。

(あおき)

想いをつなげる Vol.1

～とさっ子タウンの魅力に迫る～

想いをつなげる連載第一弾として、NPO高知市民会議に馴染みの深い「とさっ子タウン実行委員会」の学生スタッフのお二人から話を聞いた。

●とさっ子タウン実行委員会への参加

とさっ子タウン実行委員長 山本あやのさん

山本さんと、とさっ子タウン（以下、とさっ子）との出会いは大学一年の春。当時、とさっ子の実行委員長を務めていた先輩との出会ったことがきっかけとなった。先輩に誘われて参加し2年が経った今、山本さんはその先輩と同じく約100人の代表を務めている。これまで、学級委員長すら経験がなかったという山本さんだが、「代表は違うよ。代表になってから急にメンバーの名前をきちんと覚えるようになった。それに仕事量も違うし、プレッシャーというか、良い意味での責任感がある」。最初は、先輩と同じように自分も代表を務められるかという不安で一杯だった山本さんも、今ではきちんと責任感を持ち、メンバーをしっかりとまとめている。実行委員長という役割が山本さんの意識を大きく変えたようだ。

●今の環境に依存しない

とさっ子タウン代表 尾崎 昭仁さん

とさっ子実行委員会には、6つのユニットと呼ばれる部署から構成されている。その中でもプログラム作成等を行う「だんどりユニット」の代表を務めている尾崎さんは、以前は、フィールドワークなど、学外での活動が少ない大学の仕組みに不満を感じ、高知短期大学から高知大学への転学を希望していたが、とさっ子との出会いで考え方が変わったという。「1年の時にいきたいと思っていた理由がなくなっただけというか、別に短大とか関係なく期待してもらえ、ユニット代表を任せてもらってる。やろうとすればどこでもやれるなって最近思い始めまし

たね」

現在は、就職といった道も選択肢として悩んでいる尾崎さん。環境に依存せず、能動的に行動する尾崎さんなら自分のこれだという道を切り開いていくだろう。

●肩を並べて考える

最後に、とさっ子の良さについて聞いた。「実行委員会にけっこう大人がおるのに上下関係がない。ある意味、対等に話ができるしやりやすい」と尾崎さん。さらに「それぞれのユニットに、大人たちのこだわりがあって、実行委員会はその大人たちに支えられて活動している」と山本さんが付け加えてくれた。大人と学生ができる限り対等に活動していくとさっ子のスタイルが彼ら実行委員会のやる気を引き上げている。

とさっ子は今年で3年目を迎える。山本さんや尾崎さんのような学生たちと、大人たちが肩を並べて一緒に考えてつくる子どもたちのまちは、今年も子どもたちが楽しく働く姿を見せてくれる場となるだろう。

（高知大学三年 有田）

日頃の思いを綴る「寄稿文」



山本あやのさん

●とさっ子タウンにかけたい想い

山本あやの（高知大学3年生）

とさっ子タウンにかけたい想いは強すぎて、たぶん思っていることすべてを伝えることができません（笑）

とさっ子タウンの実行委員会には先輩に誘われるがまま入りました。そこには、社会のことを真剣に考えてくれている人がたくさんいて、何も考えずぼんやり過ごしていた私にとっては衝撃でした。とさっ子タウン実行委員会の話し合いでは新しい気づきについての連続でした。それぞれの職業の仕事について、税金の仕組みについて、選挙について・・・私がこどもになってとさっ子タウンに入国したほうが良いのではないのか、と思うほど「社会の仕組み」について正直なところ知らないことが多かったです。「社会の仕組み」について大学生の私もこどもたちと共に、とさっ子タウンを通して勉強中です。とさっ子タウン本番では、約300人もこのこどもたちがイキイキしています。「この仕事楽しかったな」「私の仕事得意」「起業したら超金持ちになった」「仕事後のパーはいいね」「市長の政策で給料が上がった素晴らしい」など、こどもたちの素直な感想がまちで聞こえます。

今までは、まちを体験して終了だったのが、今回のとさっ子タウン2011からは、「こども議会」が誕生して、とさっ子タウンの条例やまちの改善点について話し合っていく場を設けることになりました。こどもたちが、自分のまちである「とさっ子タウン」についてどのように考えているのか、なにを問題点だと思っているのかがすごく気になるところです。

こどもたちで、こどもたちのまちのことを考えて、こどもたちで変えていくことが、今回から本格的に可能となります。このイベントを単なる職業体験の場としてではなく、まちのしくみについて関心をもってもらえる場になってくれれば、と思います。

●今後どんなことをしてみたい

とさっ子タウンの実行委員会は6つのユニットに分かれていて、そのひとつの営業ユニットに私は大学1年生のときから所属しています。営業ユニットでは、とさっ子タウンを成功させるために必要な資金を、企業からも



らってくるという役割を担っています。そのために、企業にとさつ子タウンについて説明してまいります。

さまざまな企業を訪れることは、緊張ももちろんしますが、「この会社はどのような雰囲気なのだろう」と毎回楽しみの方が大きいです。どこの企業の方も、それぞれのプライドがあり、自分の仕事、会社に真剣に向き合っている人ばかりです。「うちの仕事の楽しさ、意味を知ってもらうために、とさつ子タウン内にうちの仕事をしたい」という企業も多いです。先日、お世話になっていたLavitaさんへ協賛のお願いに行ったのですが、結婚式についての考え方が変わるようなお話をいただきました。「結婚式はお祝いというイメージが強けれど、実際は、今まで育ててもらった親や自分に関わってくれた人への感謝を伝える場所なんだ」というお話を聞き、結婚式に対する考え方が大きく変わり変わりました。

このように、営業のために企業まわりをしていると、「その道のプロ」に直接話を聞くことができる貴重な体験ができます。私は、「仕事は大変そうだな、社会人になりたくないな」という考えから、「社会人ってプロフェッショナルになることなんだ！社会人ってかっこいい！」という考えに変わりました。

とさつ子タウンに関わっていないければ、このように企業に訪問する機会がなかったかもしれません。これからもっと様々な企業を訪れて仕事に対する想いを聞きたいし、その想いをとさつ子タウンに取り入れていきたいと思っています。

●とさつ子タウンにかける想い

尾崎昭仁（高知短期大学2年生）



尾崎昭仁さん（高知短期大学2年生）

とさつ子タウンに初めて関わったのは高校三年の夏で、当時は、当日スタッフとして木工工房でお手伝いをさせてもらいました。その時と前回、実行委員として参加した「とさつ子タウン2010」の一回しか本番を経験していませんが、今ではとさつ子タウンの大ファンです。

初めて実行委員としての参加した「とさつ子タウン2010」で、私は、カメラ記録を担当しました。まわりの1つの仕事に従事するのではなく、「とさつ子タウン」の記録をひたすら取ります。これを見ればその年のまわりの様子がわかる、そのような記録を取らなければなりません。この重要な仕事を任せられたことで、自分の中で責任感やモチベーションが上がりました。

また、カメラ記録と同時に、「しばてん」も任せられました。とさつ子タウンは、子どもたちが、しばてんという土佐の妖怪から託されたまちなのです。そのしばてんに扮しまちを歩き、記録を取ります。道行く子どもたちに「しばてんやー」「かっぱやー」「遊ばー」「カンチョー」と、もてあそばれていました。「しばてんは、かっぱやないのに……」と落ち込みつつも、すっかりしばてんであることに愛着を抱いています。

私は、その年の打ち上げで、今までの会議や準備、本番を思い出し余韻に浸っていました。すると、自然と涙が出てきてとまりませんでした。高校三年の時から今まで約一年半、まだかまだかと待ちわびていたとさつ子タウンが終わりホッとしたのか、ただ単に感動していたのか…理由はよく分かりませんが、これまでの人生で一番涙を流しました。メンバーのだれよりも、実行委員長よりも泣いていたようで「泣き虫おっくん」というあだ名をつけられてしまいました…（笑）。今思えばとても恥ずかしい事ですが、自分がとさつ子タウンに対しこれほどまでの想いを持っていることを実感できこれからももっと関わっていきたくと思えました。

とさつ子タウンの魅力は、このイベントのねらいやコンセプトにあることはもちろんですが、これに関わるヒトにもあります。とさつ子タウンに関わるスタッフには、学生をしている人や社会で働く人など様々な人たちがいますが、大人や子ども関係なしに皆さん楽しんでやっています。もしかしら、とさつ子タウンに参加した子どもたちより楽しんでいるのかもしれない。きっとそういう楽しむことができる人たちが集まって関わって行くから魅力的で感動を呼ぶイベントになるのでしょう。これからもとさつ子タウンに関わり感動していきたくと思うと同時に、一人のファンとして見守っていきたくと思っています。

●今後どんなことをしてみたい

高知短期大学に入ってからのこの一年で多くの人と関わり色々な事を経験しました。まだ20年しか生きていないのに何を言うのが、と尊敬する先輩方に一喝されそうですが、自分にとってこの一年は濃いもので、意味のある一年だったように思います。今後は、色々な事を経験してみたい、高知をもっと知りたいと思いはじめたいのでそれに向かって、楽しみながらやって行こうと思っています。

ボランティアガイダンス2011

「自分にあったボランティア活動を見つけたい人」と「ボランティアを募集したい団体」との出会いの場です。
「ボランティアに興味のある人」「ボランティアをしたいと考えている人」「ボランティアってどんなものがあるのかな?と知っている人」気軽に参加して出会いを見つけませんか。

【プログラム】

- 10:10 主催者あいさつ・オリエンテーション
- 10:20 ゲストトーク
★ボランティア“はじめの一歩”講座
- 10:40 ボランティア団体の活動紹介(対話形式)
★1団体4分×20団体予定
- 12:00 団体のブースごとに個別相談
- 12:30 終了

【出展団体(予定)】

- ・アテラーノ旭
- ・うぐるすサクラの会
- ・SON高知(スペシャルオリンピックス日本・高知)
- ・こうち有機元気会の会
- ・公益財団法人高知県国際交流協会
- ・児童養護施設 子供の家
- ・冒険遊び場づくり作戦会議
- ・特定非営利活動法人たびびと

そのほかにも、さまざまな分野から20団体程度の参加を予定しています。



日時:8月21日(日)10:10~12:30 申込締切:8月17日(水)
★今年も「ボランティアフェスティバル2011」のプログラムの一部として開催します★
場所:ふくし交流プラザ 2階多目的ホール(高知市朝倉375-1) 入場:無料

お問い合わせ・お申込み先
高知市市民活動サポートセンター 担当:又川
TEL:088-820-1540 FAX:088-820-1665
E-mail:npoj2@siminkaigi.com
主催:高知県ボランティア・NPOセンター/高知市市民活動サポートセンター



ボランティアガイダンス2010の様子

子どもたちが運営するまち 「とさっ子タウン2011」



異年齢間の子ども同士のコミュニケーションの場や生まれ育った地域に対する誇りを持てるような「きっかけ」をつくることを目的に、10~15歳(小学校4年生~中学校3年生)の子ども約300人を対象に、開催しています。

「とさっ子タウン」では、市役所、ハローワーク、銀行、税務署、新聞社や飲食関係の仕事、創作関係や娯楽関係の仕事を、子どもたちがそれぞれの専門家から教わりながら体験するとともに、市長選挙等の政治や都市運営など、子どもたちが協力しあいながら、自分たちでまちをつくることができ、変えることができるということを体験してもらうことをめざしています。

【日時】2011年8月27日(土)28日(日)両日とも11:00~17:30(予定)
【場所】りょうまスタジアム(高知市大原町45)
【お問合せ】高知市市民活動サポートセンター TEL:088-820-1540

※高校生サポートスタッフ募集!
(当日2日間参加可能で、事前に開催する説明会に参加可能の方。)
ご協力いただける方は、高知市市民活動サポートセンターまでご連絡ください。



とさっ子タウン2010の様子

高知市市民活動サポートセンター季刊誌

えぬびい Oh!

表紙・編集デザイン:国際デザイン・ビューティカレッジ 前野さくら
タイトルロゴデザイン:国際デザイン・ビューティカレッジ 西森美和 前野さくら

広報部では、イベントやお知らせチラシ、
広報誌作製のお手伝いをします!

- ①チラシを作って案内をしたいんだけど、作り方が分からない
- ②もっと効果的なチラシを作りたいけど、どうしていいのかわからない
- ③印刷は初めてなのでどうやって発注していいのかわからない
- ④素敵な写真を撮りたいけど、カメラは得意じゃない

文章に自信がないけど、広報でお悩みの団体、個人の方は
NPO高知市民会議広報部にお気軽にご相談下さい!!